映像制作を通じて、地域を見つめ直し、
福島の未来についての想いを発信しました。

フィリピンで、現地の方々と交流し、
福島の現状について伝えることができました。

チャレンジ！子どもがふみだす 体験活動応援事業

「ふくしまの未来」へつなぐ 体験応援事業

〈令和5年度〉実践事例集

台湾の学生との交流を通じて、「福島の現状と復興」を
国内外に発信することができました。

中間貯蔵施設を見学し、震災の爪痕と復興の様子に
ついて学び、理解を深めることができました。

〈主催〉福島県教育委員会

事業内容・実績

ふくしまの復興に貢献したい！ ―歩みだす子どもたちを応援します！

事 業 概 要

【事業概要】

東日本大震災から13年が過ぎ、震災を体験、記憶していない子どもたちが増えてきています。福島県では、「ふくしまの未来に向けた創造的復興教育」を実施し、新生ふくしまを担うたくましい子どもたちの育成を図っています。

この事業では、復興を教材とした福島ならではの社会体験活動・社会貢献活動を推進し、復興に貢献しようという想いを高めています。また、その想いを具現化し、主体的に復興の発信や教訓の継承等に寄与する社会体験活動を県内外で広く行うことで、子どもたちの「志」を育み、復興・地域創生の担い手を育成する事業です。

採択条件

子どもたちが主体となって自ら考え、判断し、行動を起こす社会体験活動・社会貢献活動等や地域の復興を支援する取組で、以下のいずれかの視点に係る事業とします。

(1)　被災者や避難者、復興関係者、支援者等との交流活動等の取組
(2)　地域の復興を考え、県内や他県、海外等へ復興をアピールする取組
(3)　地域の将来を見据え、地域活性化を実現する取組

補助事業者

福島県内に主たる活動拠点があり、県内に事務所を有し、地域において青少年育成活動に取り組んでいる実績を有している団体
(市町村、学校、PTA、NPO　等)

〈補助額〉

事業1　上限 50万円　事業2　上限 200万円

※上記とは別に海外渡航費として海外渡航に関わる経費の8／10以内、または100万円を上限に認めます。

※補助金額は、補助対象経費の8／10以内、または上限額どちらか低い額。

1 元気を届ける交流・体験事業

● 避難者や被災者との交流を通して、子どもたちが元気を創出する活動

例
・ 仮設住宅、復興住宅等訪問及び被災者、避難者との交流　等

アクティブ・ラーニングを実施

復興を教材とした課題解決型学習

2 今を知り思いを伝える事業

① ふくしまの「今を知る」活動
② 復興への「思いを伝える」活動
※ ①②のどちらも子どもたちが主体となって行うことが必須

例
・「被災地や震災関連施設等の訪問」や「被災者、避難者との交流・協働」等
・「地域の復興を考え、県内外への発信を行う活動」や「復興へ向けた取組や現状、ふくしまの元気や地域の特色の発信」　等

地域への誇り　自立心　創造性　社会性
困難を乗り越える力　実行力　郷土愛

自己肯定感の高まり

新生ふくしまを担うたくましい子どもたちの育成
福島ならではの教育として全県で推進

事業実績

令和5年度は　31団体からご応募いただきました。
●〈採択実施団体〉29団体 ●〈事業1〉2団体 ●〈事業2〉27団体　となりました。

つないできた未来 ～本事業を経験した先輩の姿～

- 本事業を通して資料を見ただけではわからない気づきがあることを知り、大学では物事をうわべだけで考えず、実際の場所を訪れ話を聞くように心がけている。
- 震災に関連する科学的知識をもとに自分なりの判断基準を持ってもらうための伝承について議論し、発信し続けている。
- 本事業を経験したメンバーは、震災時に世界中から頂いた支援への感謝の気持ちを持っており、災害が起こった際には率先して募金活動を行うなど、共助の思いが育っている。
- 本事業を通して、他県の方々と交流をしたことで新たな知識を得て、多角的に物事を考えることの重要性に気づくことができた。そして本事業がきっかけで福島県内のまちづくりや社会計画に興味を持ち、県内の大学への進学を決意した。
- 本事業を通じて、地元地域のよさを再発見し、お世話になったふるさとのために貢献したいという思いから、地元の町職員を目指している。
- 交流を通じて異なる文化や風土を体験し、多様な他者との交流から様々な価値観や考え方を吸収することができた。ある生徒は、地元を支えるという重要性を認識し地元企業に就職したり、また、ある生徒は専門職として活躍するために進学を目指したり、それぞれの道を選択し、歩んでいる。
- 福島のために何ができるか考え、東京都職員となり、福島県に出向し避難者支援を担当し頑張っている。
- 本事業を通し国内とドイツのエネルギー問題について学び、将来エネルギー関連の研究者を目指したいとの思いを持つようになった生徒が、大学進学に向けて学業にまい進している。
- 事業を体験し、教育に関心が高まり幼稚園教諭、小学校教諭、養護教諭になり福島の先生になり、故郷のために頑張っている。
- 本事業を通じ、福祉に興味を持ち、高校卒業後言語聴覚士になるために新潟の大学で頑張っている。
- 本事業を通しドイツの高校生との交流を経験し、英語でのコミュニケーションの大切さを実感した生徒が、英語力にさらに磨きをかけたいとの思いを強め、カナダへの留学を決めこの春渡航予定である。

実践事例 事業1

元気を届ける交流・体験事業

事業名 地域の被災状況を踏まえた課題探究
～長沼地区の被害を学んで～

団体名 須賀川創英館高等学校 課題探究班

この事業のポイント

本校は、県立高等学校改革前期実施計画により昨年度、須賀川高校と長沼高校が統合した。須賀川・長沼地域から通学する生徒が約7割在籍し、東日本大震災で被災した生徒も数多くおり、特に当地域における藤沼湖の決壊による被害が甚大であった。東日本大震災に係る被害状況や復興状況を後世に伝えていくために1年生の総合的な探究の時間を活用して、施設の訪問や被災地の視察、被災された方々への聞き取りを行った。

生徒が行う地域探究型学習内容を充実させることにより、生徒の「課題発見力」、「課題解決力」、「分析力」、「発想力」、「表現力」、「発信力」を伸ばし、「粘り強く取り組む姿勢」、「地域貢献の態度」を育成する取組を行った。

そして、生徒が取り組んだ探究内容を成果発表会で地域に直接発信・説明することにより、生徒の学習効果を高め、後世へ伝える一助とする。

藤沼ダムの見学風景

取組内容

- 6月22日(14:15～15:05)　須賀川市長沼行政区長を講師とする課題探究講演会を本校で開催した。東日本大震災における藤沼湖決壊の被害並びに復興、防災について、1学年全生徒が学習した。
- 10月17日(13:15～17:00)　防災探究を選択した生徒が、福島県危機管理センターを見学した。生徒は、防災についての理解を深めることができ、自分の命を守るためにはどのように行動しなければならないかを学ぶことができた。
- 10月26日(終日)　防災探究・地域探究を選択した生徒は、藤沼ダム・藤沼湖を見学した。生徒は、東日本大震災のことや須賀川の復興について学習できた。

事業名 ～3.11の絆をわすれない 楢葉からありがとう～
会津美里町 楢葉町 絆伝承・交流宿泊体験活動

団体名 会津美里町

この事業のポイント

姉妹都市である楢葉町において、東日本大震災の体験を風化せず、次世代につなぐため、学校活動では体験の出来ないことを経験し、会津美里町と楢葉町の子ども達の交流を図る。

具体的には、楢葉町の天神岬スポーツ公園を中心に、豊かな自然環境や日常とは異なる生活環境の中で、異年齢での集団生活や体験的活動を通して、子ども達はふれあいを深め、自立心・協調性を育くむとともに、自然の雄大さ・大切さを体感した。

また、会津美里町の子ども達との交流や、震災遺構の見学、交流についての語り部の講話を通して、東日本大震災時の楢葉町と会津美里町の交流について知り、助け合いの大切さについて考えを深めるとともに、会津美里町での交流事業(親雪体験など)につなげることができた。

語り部の震災体験談を聞く子ども達

取組内容

みるーる天神において、語り部の震災体験談を聞き取ったのち、龍蔵寺にて浸水位置を確認するなど、震災学習を行った。
その後、木戸川において、地元漁協の協力を得ながら、ガサガサ網漁を体験するとともに、川遊びを行った。
野外炊飯では、マッチを使った火起こし体験を行うとともに、防災食にもなるカレー作りに挑戦した。
翌日は、天神岬スポーツ公園において、バーナーを使ったホットドック作りに挑戦した。
その後、岩沢海水浴場において、磯遊びや海水浴を楽しむことができた。

実践事例 事業2

今を知り思いを伝える事業

事業名 あいづっこから広がる交流事業
～会津から静岡へ、次世代を担う子どもたちが繋ぐ～

団体名 会津若松市子ども会育成会連絡協議会

この事業のポイント

この事業に参加する小学生は、小学4年生で日帰り研修を、5年生で会津自然の家(1泊2日)の宿泊研修を修了した子どもたちであり、その集大成として今回の交流事業に臨んでいる。さらに、過去にこの事業を終えた中学生や高校生の先輩が、今度はジュニアリーダーとして交流事業に参加し小学生たちに指導を行う。こうしたサイクルを繰り返して、長年続けられている事業である。

事業内容について、事前研修として会津自然の家 武田 光弘 所長をお招きし、東日本大震災発生時のことについての講義や避難所生活で実際に使用する段ボールベッドの組み立てといった、震災学習を行った。そこで学んだことを子どもたち自身が静岡市の子ども会との交流会で、郷土紹介と合わせて発表を行うことで、会津若松・静岡の両市の子どもたちに震災について考えるきっかけを与えるとともに、福島の元気をPRすることにつながったと考える。

子ども会交流会集合写真

取組内容

事前研修では震災学習や避難所で実際に使用する段ボールベッドの組み立て体験、会津の郷土についての講義などを行って子どもたちが知識を深める時間を設けた。交流会の中では、会津若松市の子どもたちから震災と郷土について紹介するとともに、起上り子法師の絵付け体験を通して会津の民芸品に触れてもらうなど、福島の郷土を知ってもらうことができた。

そのほか、子どもたち同士で名刺交換やレクリエーションといった交流を深める活動を行った。交流会の最後には両市が用意したお土産品を交換し、交流の思い出として子どもたちに持ち帰ってもらった。両市の子どもたちはもちろん初めて会う者同士だったが、最後には打ち解けた様子も見られ、有意義な時間を過ごすことができていたように感じている。

事業名 交流事業「あいでみ」

団体名 あいでみ協議会

この事業のポイント

福島県内の復興課題や社会課題に関心のある高校生が、日本・福島に関心のある海外の高校生や海外の方々に福島の今を発信する事業である。尖閣諸島問題について自分たちへの直接の影響は感じられないものの、日中関係は悪化していると連日報道されていた。本当に中国との関係は悪化しているのか?中国の方たちは日本をどう考えているんだろうという問いから始まったのが、このあいでみ協議会である。2019年までは毎年行き来して交流を行ってきましたが新型コロナウイルスの影響もあり、交流が中断されてしまったこと、震災から10年以上が経過し、また2019年まで活動していたメンバーが高校を卒業していたことから、新メンバーを募集し活動を再開した。

現在は5人の1年生がメンバーとして活動している。これまで上海との交流でしたが、今年度は福島についてもっと広く知ってほしいという思いから、新しい交流地フィリピンのセブにて交流を行った。

貧困層コミュニティの訪問

取組内容

今年度は新しい交流先をフィリピンのセブとし、現地の方のお話を聞きながら、福島について発信してきました。セブについて調べてみると「リゾート地として有名」「語学留学先として人気」である一方「貧富の格差が激しいこと」「地震や津波、大火災など大きな災害を経験している」ということがわかった。日本でも社会問題となっている貧困。災害の時や有事の際に日本では保証されているけど、セブではどうなのだろう?ということを知るために、現地の貧困層の方々が暮らしている2つのコミュニティを訪問してきた。子どもたちや、同世代の高校生たち、大人の方々と交流し、福島についても伝えることができた。

事業名 震災の記憶と教訓を次の世代へ2023
震災を知り、福島の今を国内外の高校生に発信する

団体名 福島県立あさか開成高等学校
日本文化部・読み聞かせボランティア部オイガ

この事業のポイント

長崎県、福岡県、広島県を訪問し、震災で避難する人を支える人や原爆・平和の継承を次の世代に伝えるべく活動する方々と交流し、震災の記憶と教訓を風化させない方法を考えることができた。「ふくしまの今」を日本と世界に発信するオンライン交流活動を通して、グローバルコミュニケーションの向上も図れた。「想いの共有」と「ふくしまの未来を考えること」を目的にそれぞれの土地(場面)での交流を通して、様々な災害(課題)を学び、それを伝える人の想いを知り、伝え語り継ぐことの意義や重要性、そして、これからの「ふくしまのあるべき姿」について考えを深めることもできた。特に今年度は、昨年度交流した福島県に想いを寄せてくださっている方々やオンライン交流を続けている盈進高校ヒューマンライツ部、災害を知り未来へつなごうプロジェクト東北研修で本校に来校してくださった広島経済大学の皆さん、事前学習でお話を伺った長崎原爆語り部さんとも現地でお会いでき、『人のつながり(ご縁)の大切さ』を感じた。人と人がつながり「想い」を共有することは、明るい「未来」につながる。災害の多い日本に住む私たちだからこそ、震災の教訓を生かしたり、災害が起きたときに助け合うことが大切である。そのために、顔が見えるつながり『ご縁』を大切にしながら、共有の輪を広げていきたい。

長崎県・活水高校
メッセージカード交換で「想いの共有」

取組内容

①長崎の原爆を学び、平和への取り組みや語り継ぐ活動から福島の復興を考える。(活水高校交流・平和学習・長崎原爆語り部)
②ふくおか市民ネットワークとの交流活動。
③広島県で避難者支援や復興支援に取り組む団体との交流活動(ひろしま避難者の会アスチカ・盈進高校ヒューマンライツ部・崇徳高校新聞部・ひろしま紙芝居村・広島市防災士ネットワーク・南相馬ボラパス応援隊・紅葉会・広島経済大学興動館災害を知り未来へつなごうプロジェクトのみなさん)
④語り継ぐ活動から語り継ぐ意義(想い)とご縁(つながり)を大切にした。
⑤世界の高校生とオンラインで交流し、ふくしまを発信した。

事業名 福島県立安積高等学校 SSH(スーパーサイエンスハイスクール)エッセン交流事業

団体名 福島県立安積高等学校
教務部 探究班

この事業のポイント

本校はSSHに指定されており、その事業の一環である「産学官連携共創プロジェクト」の中で、地域課題解決を目指す探究活動を行っている。特に、県内全体の課題に加え、学校が所在する郡山市と連携した取り組みを進めている。郡山市はドイツのエッセン市と連携協定を結んでいるが、本校は同市の学校Gymnasium an der Wolfskuhle の学生と、SDGsをテーマとした共同プロジェクトを行ってきた。今年度もこの取り組みを継続するとともに、特にSDGsのゴール7(エネルギー分野)について、「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン」とも関わらせながら探究を進め、現地への渡航、オンラインでの交流会を実施し、「震災からの復興」並びに「ふくしまの今」を国内外に発信した。

交流の中では、東日本大震災からの復興に向けて進む福島の13年間についても発信した。海外の人たちに復興への思いを伝えるため、県内の被災地を訪れることや復興に向けて活動をしている方の話を聞くなど、今の福島を多角的に理解することからはじめ、特にエネルギー分野における福島の状況を発信できるようにした。

Wolfskuhleでの集合写真

取組内容

- 国内事前研修
  - ・浜通り地区の震災からの復興状況の視察
    ～あすびと福島による～(令和5年8月)
  - ・SSHコンソーシアム千葉 ホープツーリズム参加
    (令和5年8月)
  - ・エネルギーについて考える勉強会「理科的視点から考えるドイツ」(令和5年12月)
- ドイツ連邦共和国エッセン市訪問(令和6年1月7日～11日)
  - ・Gymnasium an der Wolfskuhle (Wolfskuhle高校)での交流活動
    ①授業参加(生活の中での持続可能なプログラミングの活用方法について、など)
    ②福島の現状発信および日本文化紹介(プレゼンテーション形式)
    ③現地校グリーンクラブ(SDGsの取り組み)についての意見交換
    ④ドイツ工業を支えた旧炭鉱Zollverein Coal Mine Industrial Complex(ツォルフェアアイン炭鉱業遺産群)の見学を通したSDGs研修
    ⑤ホームステイによる異文化交流

事業名 2023 国際高校生放射線防護ワークショップ

団体名 福島県立安積高等学校
物理部

この事業のポイント

本事業は、福島の高校生が、県外海外の高校生とともに東日本大震災や福島復興について学び、学んだことを発表するワークショップで、2015年から開催されてきた。この3年間はコロナ感染症対策のため、県外海外からの参加はありませんでしたが、今年は3年ぶりに東京都立戸山高校が参加、県内の福島高校、ふたば未来学園高校とともに4校で活動することができた。

今年は除去土壌再生利用について学ぶことを主なテーマとし、8月に3校でワークショップを実施、10月には4校で発表討論会を行いました。そこでは4校の生徒たちが、環境省が進める除去土壌の再生利用について意見を述べ、その後各校代表による討論を行った。

以後、これらの学びをもとに、参加生徒が各学校の発表会などで成果を発表した。さらに翌年5月にフランスで実施される国際高校生放射線防護会議で、各校がそれぞれオンライン発表する予定となっている。

2023国際高校生放射線防護
ワークショップ発表会(10/21安積高校)

取組内容

8月のワークショップでは、まず東海村で使用済み核燃料などの高レベル放射性廃棄物の処理について学んだ。翌日は、中間貯蔵施設で膨大な量の除去土壌の貯蔵状況を見学したのち、2班に分かれて一方は福島第一原子力発電所を、他方は富岡町の特定廃棄物処分場とガラス固化体施設の見学をし、夜は宿舎で東京電力や資源エネルギー庁の担当者から処理水や廃炉について学んだ。3日目には飯舘村長泥地区での環境再生実証事業について見学し、環境省や元原子力規制委員長田中俊一氏の講義を受けた。

安積高校の参加生徒は、12月にフランスの高校を訪れ、これらの活動を通してまとめたことをもとに、発表と交流を行った。

事業名 ふくしま浜通りまちなか大学院

団体名 福島県立磐城桜が丘高等学校
科学部

この事業のポイント

福島県が直面し今後の課題である県内の除去土壌(原発事故により放射性物質が付着した土壌)の処分や東京電力福島第一原子力発電所の廃炉について、現地を訪問し、実際に五感で感じることにより、現状を深く理解することができた。また、政府で対応している関係機関の専門家や地域住民の方々から話を聞くことで、高校生が東日本大震災の伝承の重要性を認識するとともに、福島の問題を「自分事」化することで主権者意識を高め、共感力・協働力や表現力、多様な意見を尊重する力などを身に付けることができた。他地域や他県の同世代との交流を通して、福島の課題と復興の重要性を国内外に発信することで、コミュニケーション力も育成することができた。

あすパ・ユース震災語り部隊との交流の様子

取組内容

7 月 1 日 ● 中間貯蔵施設見学
8 月22日 ● 東京電力廃炉資料館・福島第一原子力発電所見学
9 月11日 ● 経済産業省職員の木野正登氏による講話
11月20日 ● 環境省職員の脇坂肇氏による講話
11月23日 ● 浪江町津島地区石井農園見学・飯舘村長泥地区環境再生事業見学
12月21日 ● 京都教育大学附属京都小中学校との交流
12月26日 ● 浪江まち物語つたえ隊による紙芝居講演
12月27日 ● 筑波大学附属駒場中・高等学校、灘中学校・高等学校、成城学園中学校高等学校との交流
1 月20日 ● KOBE観光ガイドボランティアによる東遊園地のガイドツアー・あすパ・ユース震災語り部隊による灘区成徳地区のガイドツアーと交流会
1 月21日 ● 京都教育大学附属京都小中学校との交流

事業名 うたがつなぐ人々と まちの記憶

団体名 MJCアンサンブル

この事業のポイント

東日本大震災と原発事故を経験した私たち自身が、地域の子どもたちと共に音楽を通じ歴史文化を学びながら、震災当時の疑似体験を行う工夫をして「記憶に留める」未来へつなぐ震災継承に取り組む活動。そして、その活動が演奏会により相双地域全体、幅広い世代と共有できる活動。演奏曲は福島ゆかりの曲「雲のかなた」「群青」「汽車」「校歌」とみんなで歌える選曲にした。

- ●震災を経験した私たち自身が被災地から行動へとつなぐ活動(国内外への情報発信)
- ●地域の子ども達と共に音楽を通じ歴史や芸術文化を学び伝え郷土愛を育む活動

大木惇夫による原町一小校歌に込められた平和の願いを歌う

取組内容

①ウィーン少年合唱団交流発信活動(復興を考え情報発信) 東京都
②地域ゆかりの建築家:遠藤新　彫刻家:佐藤玄々を相馬高校生と探究活動(地域協働・郷土愛)新地町・相馬市・東京都
③小学生の参加者を募り、MJCの小中学生メンバーと一緒に震災直後の様子を疑似体験するバスツアーを行い、震災施設見学や津波被害に遭いながら全校避難した真野小学校の先生による震災体験談を聞く活動(地域協働・復興を考え県内へ発信)
④小学生の参加者を募り、MJCの小中学生メンバーと一緒にひろの童謡まつりに参加。全線復旧した常磐線に乗車して車窓から復興の進む様子をみながら、演奏する「汽車」の歌詞の世界を体験(地域協働・避難者との交流及び協働・情報共有)
⑤南相馬音楽祭では校歌をテーマにしたことにより広域の世代間交流が実現した。100年以上共学になっても変わらず歌い続けられている相馬高校校歌においては、64歳差という世代交流の大合唱となった。加えて統廃合により歌われなくなった校歌を3校分演奏した。これまでの活動を映像で上映、相馬高校生の探究発表も実施した。また、入り口では「ふくしまそなえるノート」と「ふくしまそなえるノート・避難編」を配布して防災を働きかけた。(地域協働・避難者との交流及び協働・情報共有)(7団体参加 3小学校 1高校校歌演奏)

事業名 「結」沖縄県立八重山農林高等学校×福島県立小野高等学校友好交流事業2023

団体名 小野町

この事業のポイント

本事業は、平成27年度に、小野町議会議員の方々が石垣市を訪問したことがきっかけで始まった。平成28年12月9日に小野町の名誉町民である東京農業大学名誉教授　小泉武夫先生が、石垣市の「ゆばなうれ(経済)大使」に委嘱されている縁で、沖縄県立八重山農林高校と福島県立小野高等学校との友好協定が結ばれた。これまで、年に1回、お互いの派遣団を受け入れるなど、直接的な交流を通じて、活発な地域交流を行ってきた。この交流研修の最大のポイントは、互いに地域の良いところを発信、吸収し、町の産業の担い手や地域のリーダーを育んでいくことにある。また、総合学科である小野高等学校の特徴を活かし、小野町の特産品等への理解を深め、6次化商品を開発することも目的の一つとしている。

伝統芸能で交流

取組内容

これまで、年に1回お互いに派遣団を受け入れ、3泊4日の交流研修を通して、活発な地域交流を行ってきた。本年度は、相手校の都合により双方向とはならなかったが、小野高等学校から代表生徒10名が訪問し、「福島の今」について、生徒3名による事前取材を通じてまとめ、八重山農林高等学校の全校生徒に発信することができた。処理水放出の問題など、世界的に注目を集める福島が抱える課題について同世代で共有する機会となった。また、伝統芸能の伝承や、ニラの収穫体験を経験し、両校で商品化したどら焼き「結」等の販売活動をし、6次化商品の販売と、新商品の開発を目指し、地域産業や農業の活性化につながる活動を目標に交流を行った。

事業名 「未来につながる復興キャンプ」プロジェクト

団体名 ガールスカウト福島県連盟

この事業のポイント

東日本大震災から13年が経過し、少女会員は震災以降に生まれた子どもたちと復興と共に成長してきた子どもたちとなった。そこで、改めて震災について学び、福島の現状や復興について、これまで培ってきた防災・減災の知識や技術を発信していくことを目的として実施した。

8月には基調講演を実施し、「よそ者から見た福島県」という演題で、福島県の復興や福島県の魅力をアピールするにはどうしたらいいのか、ということを学んだ。

11月に実施した「復興キャンプ」では語り部の方から震災当時のお話を聞いたり、防災・減災に関する○×クイズやバケツリレー、防災ホイッスル作りを体験したりしました。また、震災遺構請戸小学校や東日本大震災原子力災害伝承館を見学した。自分の命を守ること、備えることの大切さ、仲間と協力することの重要性を学んだキャンプとなった。

現在、キャンプで感じた思いを川柳・短歌にのせてSNSで発信中。海外の方にも伝えるために英語での投稿にも挑戦している。今後も福島の復興や災害時に役立つ技術などを社会に発信していく。

東日本大震災原子力災害伝承館見学

取組内容

2023年 6 月　「実行委員会結成」

2023年 8 月　「基調講演」「実行委員会」
外部講師をお呼びし、「よそ者から見た福島県」という演題で、福島県が他県からどのように見えているのか、福島県の魅力をアピールするにはどうしたらいいのか、ということを学んだ。

2023年11月　「未来につながる復興キャンプ」
語り部講話、震災遺構や伝承館の見学を行い、福島の現状を知り、社会に伝えるための川柳・短歌を作成した。また、震災を経験していない小学生が楽しみながら防災への意識を高められるよう、ゲームや防災ホイッスル作りを行った。

2023年12月　「実行委員会」
実行委員会を行い復興を発信していく方法として川柳・短歌を選んだ。県内の小学生から高校生までの会員で川柳・短歌の動画を作成し、県連盟公式SNSで発信中。海外の方にも伝えるために英語での投稿にも挑戦している。今後も福島の復興や災害時に役立つ技術などを社会に発信していく。

事業名 SSH海外研修「台湾現地研修」

団体名 福島県立会津学鳳高等学校SSH部

この事業のポイント

本校は文部科学省からSSH(スーパーサイエンスハイスクール)校の指定を受けており、平成25年度から海外研修を実施している。海外で同世代の高校生に、福島の子どもたちの「ふくしまへの想い」を対面で伝える活動は、事業の目的達成に非常に効果的といえる。

また、根拠ある知識を基に「想い」を正確にかつ深く伝えるために事前研修として、ふくしまの「今を知る」活動を二つ実施した。一つ目は、経済産業省職員による「ALPS処理水の処分に関する対応」の講義の受講である。専門家からの説明と質疑応答、ディスカッションにより正しい知識を身に付けた。二つ目は、被災者による講演「震災当時の状況を知る～福島と宮城の状況～」の聴講である。福島で原発事故に遭った方と宮城で津波被害に遭った方の二名の方から直接話を聴き、対話したり意見交換したりしたことによって「ふくしまの未来」への「想い」を深めた。

事前研修を基に、震災を経験していない海外の人たちへ「想い」を正確にかつ深く伝えるべく、生徒たちは英語のプレゼンテーション発表を準備した。

建国高級中学でのプレゼンテーションのようす

取組内容

建国高級中学では、「双葉地域の現状と復興」というテーマでプレゼンテーション発表を行った。多くの人々が原子力発電に希望と期待を抱いていたこと、震災による原発事故によって故郷が奪われ、希望が失われたことを丁寧に発表した。震災から10年以上たった今も、産業課題が山積みであることを説明し、それらを解決するための提案を行った。

発表後は生徒同士が個別に意見交換や感想を述べ、互いの理解や伝えたい「想い」を深める活動を行った。

別日には、国立清華大学や関渡自然公園の施設でも大学教職員や現役大学生、現地の専門家に対して各班が準備したプレゼンテーション発表を行い、「想い」を伝えた。

事業名 演劇を通じた高校生による葛尾村の震災と復興の記憶発信事業

団体名 一般社団法人 葛力創造舎

この事業のポイント

葛尾村では2016年6月に一部地域を残し避難解除が行われた。しかし、2022年度の帰村者は震災前の約1500人に対し300人ほどである。また、高齢者率は47パーセントとなっている。今後、震災前から震災後を通じて、村の震災と復興の記憶をつないでいく世代が少ない。

本事業では、次世代が少なくなった被災地葛尾村をフィールドに、高校生が葛尾村の震災と復興の記憶について、葛尾村住民へインタビューし、演劇という手法で発信を行っていく。高校生による震災と復興の記憶の保存と発信をもって被災地の活性化に寄与することを目的にしている。

特に、地域の震災と復興の記憶は、文字におこし発信するとその思いはなかなか伝わりづらい。そこで、演劇という手法を用いて、想いもリアリティをもって伝えられると考えた。

演劇で舞う高校生

取組内容

今回の事業では、葛尾村の住民と高校生(ふたば未来学園演劇部)が関わり、葛尾村の震災記憶の保存と演劇による発信を行った。

【取組①葛尾村の震災と復興の記憶の保存活動】
参加する高校生が震災と復興の記憶を知り、住民と関係構築をするためにインタビューを行い演劇を創作した。

【取組②葛尾村の震災と復興の記憶の発信活動】
インタビュー時に得た葛尾村の震災と復興の記憶をもとに、葛尾村の住民と、演劇を一つ創作した。高校生が創作した演劇は実際に葛尾村で上演した。

事業名 『福島の～今を生きる声～を明日へ伝える』

団体名 子どもに音楽を贈る会

この事業のポイント

音楽を中核とした各活動を通じて、子どもたちの発する問題提起により、大震災の持つ生活への影響、子どもたちの人間関係への影響等を見る人に考えさせ、少しでも風化を防ぐ効果がある。

特に、県外の開催においては、改めて福島の震災の根深さを知り、震災を自分のものと考えさせる契機になり自治体、教育関係者等による被災地視察等も組まれ継続的な関係が生まれて来ている。

当事業の実施により多くの音楽会を実施し活発化させ地域・文化振興にもつながっていく。また、子ども達の歌や創作劇のミニコンサートや地域の方々との交流や心の防災コーディネートMAPを配布することにより、今現在の福島の復興状況や福島に生きる人々の心の葛藤と希望をより強く伝えることができ、発信する側も、震災の影響を受けている子ども達の心の整理や、被災当事者の方々に伝えていく大切さを感じることができる。

取組内容

①「福島しあわせ運べるように今の思いを発信プロジェクト」
- クリスマスLive配信

②発信用冊子「心の防災コーディネートMAP③」取材・学習会
- 東日本大震災学習会(宮城県・福島県)
- 新潟県中越地震学習会・発信活動(今の福島発信震災授業)

③阪神淡路大震災学習会・発信活動
- 「神戸親和女子大学」との交流
- 神戸市長田区「大正筋商店街」コンサート
- 神戸市「ふたば学舎」で地域の方々へ

『福島の今を発信展と今の福島発信震災学習』を行った。

④発信用冊子「心の防災コーディネートMAP③」1000部作
- 震災取材の方々、「今の福島発信震災授業」等様々の交流時に発信素材として配布。二本松市内小中学校、浪江、新潟、神戸、東京多摩市、熊本関係者へ寄贈した。
- 資料展示会『福島の今を発信展』を二本松コンサートホール及び訪問各所で開催した。

神戸市
「ふたば学舎」『福島の今を発信展』

事業名 元気を音楽にのせて ～福島からキックオフ！～

団体名 Seeds+

この事業のポイント

- 墨田区役所で行った「福島の観光や物産」を中心としたワークショップ、Seeds+を題材にした復興支援映画「MARCH」の上映、メンバーが調べてまとめた「福島の今」報告会、福島の「元気発信コンサート」を通して、福島の現状や支援への感謝の気持ちを伝える活動を行うことができた。
- 福島の今を知る活動を通して、「正しい情報を多くの人に伝えたい」という思いが育った。イベントに来てくださった方々の生の声や、来場者アンケートの結果から、たくさんの方々に福島の復興の様子や食の安全性が伝わり、福島を訪れてみたいと感じて頂けたことで、多くのメンバーが自己肯定感を高めることができた。
- 事後に行ったミーティングでは、本事業を通して福島について新しい学びがあったことや、福島の未来について考えていく良い機会になったことなど、前向きな意見が多く出された。これからの福島を生きていく子ども達に大きな活力となった。

手作りのぼり

取組内容

- 福島の安全性や、そこに住む子ども達の元気を発信し、福島の復興をアピールする。
  - ・観光物産復興PRイベントを墨田区役所ホールで開催した。年末の忙しい時期ではあったが、メンバーたちが手書きでまとめた資料や手書きののぼりが目を引き、多くの方々が足を止めてメンバーの話を聞いてくださった。来場者の生の声を聞きながら、メンバー自身の言葉で丁寧に観光や物産、復興をPRすることができた。
  - ・来場者アンケートの結果、ほぼ100%の方々に福島の復興や食の安全等を理解して頂けた。また、報告会や映画、コンサートも80%以上の方々が「非常に良い」と評価してくださった。

事業名 塙の和太鼓で復興への思いを伝える
～ふくしまの元気発信プロジェクト～

団体名 福島県立白河実業高等学校 塙校舎和太鼓部および生徒会

この事業のポイント

①清水寺と伏見稲荷大社で和太鼓奉納演奏！
福島復興へお力添えを賜ったことへの感謝と、日本全国の被災地の復興、世界平和の祈りを込めて、和太鼓による奉納演奏を行った。
②京都市立二条中学校難聴学級生徒と交流
和太鼓による交流と発表の場を設けて互いの思いを伝え合えた。
③阪神・淡路大震災について学習
阪神・淡路大震災人と防災未来センターを訪問し、震災学習を行った。
④食の安全をPR
ふくしまの「桃」で食の安全をPRしてきた。
⑤町の特産品をPR
塙町の特産品である「ダリア」をうちわのデザインにして配布した。
⑥福島県の復興と魅力を発信！!!
独自のリーフレットを配布し、福島県の復興と魅力をPRしてきた。

清水寺にて奉納演奏

取組内容

★地元の魅力を知り、お土産製作★
7/27 ①巾着袋ダリア染め体験 ⇒ 巾着袋をお土産に
②白河だるま絵付け体験 ⇒ 白河だるまをお土産に
8/1 ③ダリア摘み体験 ⇒ ダリアの花をお土産に

★震災学習★
7/28 いわき語り部の会による現地震災講話

★関西★
8/2 ①阪神・淡路大震災「人と防災未来センター」にて震災学習
②メリケンパーク、心斎橋周辺で「ふくしまの復興魅力PR」
8/3 ①京都市立二条中学校難聴学級生徒と和太鼓交流
②嵐山にて「ふくしまの復興魅力PR」
③伏見稲荷大社にて和太鼓による「奉納演奏」
④伏見稲荷大社にて「ふくしまの復興魅力PR」
8/4 ①京都市立二条中学校難聴学級生徒と和太鼓交流
②二条中学校難聴学級生徒と互いに思いを伝える会を開催
③錦市場にて「ふくしまの復興魅力PR」
④清水寺にて和太鼓による「奉納演奏」
⑤清水寺にて「ふくしまの復興魅力PR」
8/5 ①ひらかたパークにて「ふくしまの復興魅力PR」

事業名 ふくしまの想いがめぐる
～Fukushiaと世界を”ツナグタビ”～

団体名 聖光学院高等学校 普通科 進学探究コース タンキュウブ

この事業のポイント

本事業は福島に残り続ける商品開発に向け立ち上がった地域メディア型ブランドである。以下の目的の達成しながら、大学生と高校生が卒業した後もブランドと商品が残り続ける全国初のモデルケースとなるべく、活動を行っている。
①地域課題を地域資源に変える
②地域を巻き込む
③地方と都会を繋げる
④福島を世界に伝える
⑤福島を代表するブランドとなる
立ち上げ2年目となる今年は、先輩のバトンを受け継いだ後輩たちが今の福島と世界を”ツナグ”活動を実施した。福島大学の留学生にご協力を頂き、「お茶を飲む」という世界共通の文化を通して交流し、今の福島を世界に発信する商品開発を実施した。またお茶には原発事故の影響で11年間出荷することができなかった信夫山のゆずを使用し、かつて北限のゆずと言われた信夫山のゆず復活も同時に目指す取り組みである。

留学生とともにお茶の試飲及び調合の様子

取組内容

10月より月1回福島大学を訪れ、国際交流を通して福島を世界に発信するお茶づくりを目指した。
8 月23日：TEA&THINGS動画撮影①
10月19日：TEA&THINGS動画撮影②
10月25日：留学生との交流① TEA&THINGSの取り組み発表及び国際交流
11月29日：留学生との交流② お茶の調合、パッケージ、ネーミングの選定
12月15日：今の福島を高校生が伝えられるための震災学習
東日本大震災伝承館及び請戸小学校見学
12月20日：留学生との交流③ 新商品に向けての投票
TEA&THINGS紹介動画についての議論
12月23日：市場調査
国見町のイベントにて試飲及びアンケートの実施

事業名 災害で使用したブルーシートを再利用した防災意識を高める商品開発

団体名 相馬総合高校「商品開発」

この事業のポイント

『大切な人へ防災意識を高める商品』の作成
本校は防災・復興教育に力を入れており、地域の方々との協働を通じて復興支援センターMIRAIの高橋あゆみさんと出会った。
あゆみさんが所属する「災害サポートボランティアたすけっと相馬」は、2022年3月16日に発生した震度6強の地震で、被災した家屋に使われた“ブルーシート”を再利用して「ブルーシードバッグ」の制作・販売を行っていることを知った。
被災した家屋を守ってくれたブルーシートを使用することで、大切な人を守るために、防災意識を高める商品を作ることをコンセプトに、生徒たちが4つの商品を考案した。また、本校の活動であることが一目でわかるよう、プロジェクト名を考えたのち南相馬市のデザイン会クムトの樋口徹さんにご指導いただき、ロゴマークを制作し、商品に添付するリーフレットの制作も行った。
商品の企画をする中で、地域で活躍する企業の方々10社をお招きし、活動報告と試作品・ロゴの発表会を行い、商品に込めた思いを伝えた。

「ブルーシートバッグ」の試作品発表会

取組内容

手にした方々の防災意識を高められる商品の作成というコンセプトを立て、大切な人を災害から守るためには…という意識で商品を開発した。そのために、外部との関りを多く持ち、社会人の方を招いてニーズの聞き取りを行ったり、たすけっと相馬さんのご協力のもと実際に使用されたブルーシートを裁断・洗浄したりした。自分たちの手で使用する素材知り、洗浄したりすることを通してまず自らの意識を高めた。商品の試作品のプレゼンや、デザイン・メディア関係者へ制作したロゴのアンケートを行い、客観的な意見をいただきながら制作活動を行った。商品は身近で手にするものという視点からキーケース・パスケース・ペンケース・ブックカバーを制作。明日に向かって挑戦し続けることを追加コンセプトに、プロジェクト名を「アストライ」と決めてロゴと商品に添付するリーフレットを制作した。発表会では、参加者の皆さまから取り組みへの激励の言葉をいただいた。度々新聞にも取り上げられたことで、相馬高校生にも興味を持っていただき取材を受けた。本事業で様々な方々とのつながりが広がり、多くの方々の防災意識を高めるきっかけとなればと思っている。

事業名 相馬ながれやま踊りJuniorの会による福島の魅力発信事業

団体名 相馬ながれやま踊りJuniorの会

この事業のポイント

令和5年の夏、かつてない酷暑の中、日本中のフルーツ売り場を独り占めしていたのは福島県の「あかつき」だった。東日本大震災から12年が経ち、福島県のイメージが一変していると感じた。本会の踊りを「あかつき」のイメージと重ねたいと考えた。
創立以来、頑張り続けて来たメンバーたちも22歳を迎え、活動の継続が難しくなっていた。令和5年、本会は大きく舵を切った。踊り手の募集を小学5･6年生にまで引き下げた。これが功を奏した。どの活動でも、その半数が新人さんで構成される程、小中学生たちが集まってくれた。長野の善光寺、鎌倉の鶴岡八幡宮、箱根の箱根神社、会津若松の鶴ヶ城、南会津の大内宿。いずれも小中学生が主となって演舞した。
「あかつき」のみずみずしさをイメージに、若返った本会は各回共に、大きな拍手を頂戴した。大きな拍手は彼女たちをより大きく育ててくれる。それは個々の踊りの大きさとなって表われて来る。大きな踊りは観客をより惹き付ける。

鎌倉鶴岡八幡宮にて奉納公演の様子

取組内容

たくさんの観客を前に堂々と福島っ子は演舞しました！
- 福島県南相馬市 国の重要無形民俗文化財 相馬野馬追にて相馬流山踊りを演舞
- 福島県会津若松市 鶴ヶ城にて演舞
- 福島県南会津郡下郷町 大内宿にて演舞
- 長野県長野市 善光寺にて踊りの奉納公演を実施
- 神奈川県鎌倉市 鶴岡八幡宮奉納公演を実施
- 神奈川県足柄下郡 箱根神社奉納公演を実施

事業名 未来の福島を考えるプロジェクト
～ふるさと高野を守りたい～

団体名 棚倉町立高野小学校

この事業のポイント

昨年度、児童らは避難生活を送る上で必要となる「さすけなぶる」について学んだり、避難時における簡単な食事の作り方を学んだりしているうちに、もっと学びたいという意欲が生まれ、東日本大震災についてしっかりと学び、復興について知る必要性を感じるようになった。そのため、今年度、総合的な学習の時間に震災や防災について学び、双葉方面を訪れ、自分の目で東日本大震災の影響や復興の様子について学び、これからの未来を考えていくことを目的とした事業を考えた。また、本町は町をあげてキャリア教育に取り組んでおり、本事業での学びが児童一人一人の生き方や未来を考えていくように配慮し学習を進めていけることも強みの一つである。事業目標においては、東日本大震災の記憶の継承者となれるような学びを児童主体で展開し、これからの未来について考え、自分の言葉で伝えられるように支援することを目標とした。
特に本校においては、高野地区の本来持つ強いコミュニティーを生かし、児童自身でこの愛する高野地区を守るためには何が必要かを探究していくことで、防災学習に児童一人一人が必要性を持たせていくことがこの事業の成果につながると考えた。

震災遺構請戸小学校での見学の様子

取組内容

- 地域のこれからについて考えよう(自分たちにできること)～総合学習を中心に進めた。
- 修学旅行での学び(福島市訪問、赤十字血液センター、福島県警本部、南相馬消防防災センター、福島ロボットテストフィールド)を通して、災害が起きたときの具体的な活動や、ロボットの活用事例について知識を深めた。また、富岡町3･11を語る会の方の講演を聴くことにより、東日本大震災についても理解を深めることができた。
- 学びを整理するために、講師として福島大学客員教授の天野和彦先生をお招きして、防災活動において自分たちにできることを教えていただいた。
- ここまでの学習をいったんまとめ、授業参観を活用して保護者の前で発表会を行う。また、事業の一環として郡山において、成果発表会に参加し、他団体の取組なども知ることができた。

事業名 ふるさと創造・映像教育プロジェクト

団体名 ひろの映像教育実行委員会

この事業のポイント

広野中学校の生徒たちは以前より、人それぞれに歴史(人生)があることや見慣れた当たり前のことに価値があること、世代を超えた触れ合い・交流の大切さを感じた。この活動で、広野町に住む方々や地域で働く方々に焦点を当て、広野町の現状を知り、広野町に伝わる歴史・文化・伝統・暮らしなどを見つめ直すことで、生徒たちが「ふるさと広野」のよさを再発見し、未来に向けて歩み出せるよう、自ら進んで地域の方々とかかわり、自ら考え、創造する活動に取り組んだ。
子どもたちがふるさとの「ひと・もの・こと」を直に感じ、大人にはない「中学生ならではの感性」を活かして、「その魅力を誰にどう伝えるか」「自分の思いをどう表現するか」等、友達と試行錯誤しつつ、外部講師や地域住民とかかわりながら、活動を創り上げる点が大きなポイントである。

広野町子ども議会に臨む生徒たち

取組内容

1学年は「ふるさとの魅力を探る」をテーマに地域と食に着目して学習を行った。外部講師が授業に参加し情報収集スキルなどを学んだ。
2学年は「ふるさとの魅力を伝える」をテーマに学習に取組み、職場体験を組合わせる形で、宿場体験で知り得た情報を基に、広野町に存在する職業人の図鑑を制作し配布した。
3学年は「ふるさとを創る」をテーマに学習を行った。これまでの探究を活かした政策提言を目指して、最終的な「まとめ・表現」の場として、広野町子ども議会を活用した。授業には外部講師の他に、大学生がサポーターとして参加した。

事業名 日英サイエンスワークショップ

団体名 福島県立福島高等学校 SSH部

この事業のポイント

現在の日本は、あらゆる産業でグローバル化が求められ、外国語を使えるだけでなく、世界的な視野から課題発見・課題解決ができる人材の育成なくしては、もはや日本の発展は考えられない。また、グローバル化に対応できる人材の育成は、福島だけでなく日本の喫緊の課題である。そこでこの取組みでは、福島県内の震災関連施設での研修や、東北大学における研究室活動等を通して、英国の高校生徒と、文化的な相互交流に加え、科学を通した相互交流を行うことで、将来的にリーダーとして世界で活躍する人材の育成を目指した。特に2011年に起こった東日本大震災により、「Fukushima」の知名度、注目度は世界的に高まったことから、この高まりを好機として捉え、海外の人たちに現在の日本あるいは福島の現状を伝え、復興に向けた姿勢や取り組みをアピールすることを主要な目的の1つとしている。

東京電力福島第一原子力発電所での研修の様子

取組内容

英国の高校生、教員(30名程度)を日本に招き、東北、関東、関西の高校生、教員(30名程度)と共に、東北大学での研究室活動、福島県や宮城県での震災復興関連活動、自然体験活動等を行った。特に福島県におけるフィールドワークでは、東日本大震災・伝承館、東京電力廃炉資料館、東京電力福島第一原子力発電所において研修を行い、その後、全参加者で処理水の海洋放出、廃炉に向けた現状と課題等について、英語によるディスカッションを行った。海外の高校生だけでなく、福島県外の高校生の考えを聞き、多種多様な視点から福島の課題を考え、自分の考えを発信することで、将来の行動変容へとつながる唯一無二の体験となった。

事業名 福島を知る・伝える・盛り上げる

団体名 福島県立ふたば未来学園高等学校 社会起業部

この事業のポイント

震災から10数年がたった現在、双葉郡内に唯一となった高等教育機関のふたば未来学園は、地域と連携し、原発事故によって発生した、あるいは加速した諸問題を考察している。とりわけ本校社会起業部は福島の今を分析し、他地域との比較を行ってきた。具体的な活動としては、双葉郡や福島県を「知る・伝える・盛り上げる」をモットーに、他県から訪問する高校生・大学生と交流活動や動画製作等をしている。本年度も、福島のことを知りたいと本校を訪ねてくる他県の高校生や外国の方などと交流した。

また、福島の原発事故を考察するにあたって、原発事故は核の問題としては広島的であり、NIMBY施設としては沖縄の米軍基地的であり、環境問題としては水俣的であるという仮説から、冬季に水俣と沖縄を2年かけてフィールドワークを行っており2022年末には沖縄研修、2023年の12月20～22日は水俣研修を行い福島との比較をするとともに、福島の現状を伝えた。

水俣病患者講話および県産品アピール

取組内容

「伝える活動」　他県の学生(計7校)との交流を行った。
「盛り上げる活動」　只見線全国高校生サミット(最優秀賞を受賞)。
「知る活動」　8月3～4日、津波被害学習のため宮城研修を行った。12月20～22日には水俣研修を行った。ホテルで振り返りでは生徒は以下のような感想を出した。「水銀含有の土が入っているエコパークと福島の中間貯蔵施設との類似性に気づけた」「加害者の立場に立つことも重要。分断を避けるためにどうすればよいか考えられた。これからの学びに活かしたい」

事業名 高校生による「ふくしまの未来を描き伝えるプログラム」事業

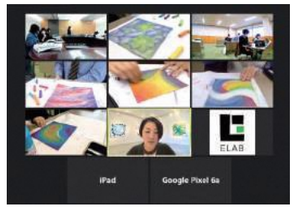
団体名 一般社団法人 Bridge for Fukushima

この事業のポイント

震災を経験した福島の高校生たちが、不確実な未来を主体的に切り拓く力や、コミュニティーを牽引するためのリーダーシップを養い今後活躍するために、アートを用いた「鑑賞」「創作」「鑑賞」という「アートワークショップ」を体験し、自己認知や他者承認、表現力などを深め、自分の中にあるモヤモヤや課題意識と向き合い、自分の想いを言葉で表現できるようになる。

アートワークショップを実施している、一般社団法人ELABと協働し、生徒自身が考え表現し言葉にすることを見守るスタンスで、必要最小限のファシリテーションを心掛けることで、生徒同士で場をつくることができる。

EGAKUを真剣に取り組むからこそ、自分の想いを丁寧に、しっかりと未来の自分について振り返ることができる。



第1回 EGAKU
郡山と会津若松2会場同時にオンラインで繋ぎ実施した様子

取組内容

まず、相双地域、今回は双葉町の伝承館を訪問し、震災時からその後の様子、地元の方の話、語り部を聞き、自分たちの住んでいる福島を知るという体験をした。

一般社団法人ELABが展開する、主体性・創造性に働きかけるプログラム「EGAKU」アートワークショップ、アートの鑑賞・テーマに沿った創作・作品の鑑賞・振り返り(4時間)を3回実施し、最後に全体をとおした想いをオンラインで振り返える。

事業名 地域探究が深める・つなげる地域と震災の記憶 ～福島・台湾をつなぐ～

団体名 一般社団法人 未来の準備室

この事業のポイント

白河市では、若年層の震災の記憶の風化が課題となっている。また、放出が開始された処理水を巡って、アジア地域では特に強い風評被害があり、海外への情報発信が福島県全体の課題である。

本事業では、復興の過程を、高校生の実践と学びを通じて伝えることに取り組んだ。参加者として震災に関連する探究活動を実践した高校生を募り、その経験を発信することを目標とした。事前研修では白河市内被災自治会へのインタビュー、双葉郡の伝承施設見学等を実施。台湾での発信活動に臨んだ。

台南市・竹山市・新竹市の3都市で、白河市での被害、探究活動や処理水の現状について発表を行った。英語での交流に苦戦しながらも、台湾の高校生・大学生の地域活動について紹介を受け、互いの実践と学びを交歓する場になった。帰国後、実践を地域住民等に発信する報告会を実施した。

探究的な高校生の活動が、記憶の継承や地域課題解決を牽引する未来に向けて、活動を継続したい。

台南市で日本語を学ぶ大学生らに、白河市の東日本大震災の被害や、処理水の現状について発信した

取組内容

7月に事前研修及び福島県内での取材活動を実施。白河市葉ノ木平地区土砂災害を経験した自治体を取材したほか、東京電力廃炉資料館やとみおかアーカイブミュージアムを訪問、震災復興・防災に関する地域探究活動を実施している若者・教育関係者への取材活動を行った。8月には台湾を訪問。台中市に位置する国立自然科学博物館 921地震教育園區を訪問、1999年台湾大地震の被災状況・復興の記録を視察した。白河市と交流のある台南市では、台日文化友好交流基金会と連携し、東日本大震災について発信を行ない、白河市葉ノ木平地区で行われている高校生の探究活動(そなキャン)と、福島第一原子力発電所処理水の現状について発表し、日本語を学ぶ学生らと対話した。11月には活動報告会を白河市内で開催、地域住民と対話の時間を設けた。

事業名 ふくしまの復興と地域の魅力を発信するプロジェクト

団体名 白河実業高等学校 塙校舎 3学年 地域探究班

この事業のポイント

現高校生は東日本大震災時に3～5歳であり、原発事故についての知識や体験が少ないと感じた。そのため、震災と原発事故について多く学ぶ機会を作った。ふたば未来学園との双葉駅フィールドワーク、伝承館での専門研修、大熊未来塾の木村紀夫さんとのオンライン研修、富岡町役場で働き復興のために活動する秋元菜々美さんの話しを伺い、伝える活動のための準備を行った。それ以外にも、イノベ事業を活用して復興を学んだり、地域魅力の発見や発信などを行ったりした。それらの活動の多くで振り返りシートを活用し、何を学んだのか、何を伝えたら良いかを考え続けた。私たち自身が、震災について深く学ぶことを重点に置いてこの事業に参加した。

沖縄県では、地元高校生との交流、沖縄戦の復興や基地問題について学ぶことを通して、原発事故から復興を目指す福島について考えた。

興南アクト部との交流

取組内容

福島で知る活動
- ふたば未来学園高校とのフィールドワーク
- 伝承館での専門研修「ボードゲーム型復興・廃炉体験で学ぶ福島学」
- 大熊未来塾　木村紀夫さんとのオンライン研修
- 富岡町役場職員　秋元菜々美さんの震災研修

沖縄で伝える活動・知る活動
- 興南高校アクト部との交流会 in首里城
- ㈱さびらさんからの基地問題学習
- 嘉数高台、平和祈念公園、ひめゆりの塔での平和学習
- 沖縄県庁前で福島復興パンフレットの配布

事業名 こども映画学校

団体名 福島こどものみらい映画祭実行委員会

この事業のポイント

3日間で映画を制作するプログラムである。地域の小学校、教育委員会とも協働をしながら、地域が抱えている課題などを教育委員会や学校とも協議しながら、映像制作を通じ、自らのふるさとについて考えさせ同じ地域に住むもの同士の心と心を結ぶことをねらいとした。

また、地域での撮影もする場合、地域住民の方々への出演依頼も子供たちが行い(後でスタッフが詳しく説明に伺う)、交渉能力やコミニケションの重要性も学ぶ。被災地の子どもたちとの映像制作を通して、福島の現在や未来を考える機会を提供することで、地域を担っていく人材育成を図っていくこととした。

作品上映終了後の全員で記念撮影
ポスターも手書きで制作しました。

取組内容

「こども映画学校」は第一線で活躍している映画監督、映画プロデューサー等を講師として迎え、こどもたちが10名ずつ3班に分かれて、3日間で企画・脚本・ロケーションハンティング・撮影・演技・映像編集・音楽などの一連の映画製作を学んだ。ふるさとの課題に触れながら、新しくなる町の姿や、そこに住む人々などを作品のテーマとして考え、ふるさとのもつ意味について感じながら1つの短編映画を制作した。こどもたちは、企画やシナリオ作りに取りくみ、学んできたことや、描きたいテーマ、伝えたいメッセージについて議論を交わし、同時に誰がどの役割を担当するかを決めた。俳優をするのもこども達。演出の講師と共にシナリオを作りながら、撮影・録音を担当するこども達は、それぞれの講師から機材の使い方などを学んだ。そして最終日には完成した作品を学校の先生方や児童、保護者の皆さんにお披露目した。その際には舞台挨拶も行い、作品に関する苦労や思い出等を発表した。

事業名 ふくしま浜通り高校生会議

団体名 特定非営利活動法人 ハッピーロードネット

この事業のポイント

東京電力福島第一原子力発電所を見学し、現在の廃炉の状況を知ることができるが、一般的な見学コースではなく、事故を起こしていない原子炉建屋に入り、燃料プール内の使用済み核燃料等を見学したり、多数のタンク群とALPS処理水を放出している行程を実際に確認したりすることで廃炉についてより深く理解することができた。また、処理水の放出に関して直接的に関わる水産業や水産資源を扱う飲食店の方々、廃炉作業・処理水対応を管理する経済産業省職員、放出に関する情報の伝達、関係するこれらの人々の声を伝えるメディア関係の人々の話を聞くことにより、社会問題を「自分事」化することで主権者意識を高め、共感力・協働力や表現力、多様な意見を尊重する力などを身につけるとともに、福島の直面する課題と復興の重要性の知識を高め国内外に発信した。

報告会の様子

取組内容

- 10月 7 日 ● 相馬双葉漁業協同組合相馬原釜地区青壮年部底曳部会による講話・山常水産株式會社の鈴木孝治氏による講話・海鮮四季工房きむらやの木村重男氏による講話
- 10月 8 日 ● 福島中央テレビの野尻英恵氏による講話・テレビ朝日の吉野実氏による講話・東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センターの安本真也氏による講話
- 10月 9 日 ● 経済産業省の木野正登氏による講話
- 11月11日 ● 東京電力福島第一原子力発電所見学および小野明氏による講話
- 11月12日 ● 経済産業省の新居泰人氏による講話・福島県議会議員の渡辺康平氏による講話
- 1 月 8 日 ● 講師や関係機関を集まっていただき、高校生としての考えや提言を行う報告会を開催

事業名 復興から12年！“ふくしまの今”を伝え、思いを伝え、その先をめざす！！

団体名 白河実業高等学校 塙校舎 探究チーム

この事業のポイント

①スマホスタンド
福島県の復興を県外でアピールするため、工業高校であることを生かしてレーザー加工機を使用してスマホスタンドを制作した。このスマホスタンドは組み立て式でデザインとして復興の象徴であるべこ太郎の刻印が入っている。

②2学年探究チームリーフレット
「福島の今」を伝える復興リーフレットを作成した。感謝、創造、伝承というキーワードを軸に、福島での復興活動や学びに焦点を当てた内容である。リーフレットには、地元の人々が感謝の気持ちを込めて行っている様々な活動やプロジェクトが紹介されており、学校における取り組みが掲載されている。これを通じて、福島の復興への取り組みと、その中での感謝の気持ち、創造力、伝承の大切さを広く伝えることができる内容としている。

③果物
福島の塙町は、その美しい自然と豊かな土地で知られている。奈良、京都で地元産のメロンとリンゴを配布することは風評被害の払拭につながる。

④その他
マスク、アルコールティッシュの配布

薬師寺にて
ご法話後の記念撮影

取組内容

①薬師寺にて、復興のPRとして活動を行った。ご師匠様にご法話をいただいた後に地元産であるメロンとリンゴ、そして特別な記念品を配布し、福島の魅力と復興への決意を共有した。また、ご師匠の計らいで弥勒三尊像に果物をお供えすることができ、福島と信仰、そして未来への感謝の心を結びつけた。

②奈良公園から5分のところに三条小鍛冶宗近本店があり日本刀や高品質の包丁を製造している有名な店である。お店を訪れる多くの人々に福島の魅力と現状を伝えることができた。震災当時にお店の方が個人的に福島県で炊き出しのボランティアに参加されており震災時のことを話し、交流できたことで深い感謝の気持ちを伝えることができた。

子どもたちの活動を
支えてくださった皆様、
ご協力ありがとうございました。

福島県教育庁社会教育課　令和6年3月発行

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。